

俱舎論註『金花抄』について

百 濟 康 義

はじめに『宋高僧伝』(T No. 2061, Vol. 50)は、崇虞なる人物が『金華鈔』十巻を、玄約なる人物が『俱舎論金華鈔』二十巻を著わしたことを伝えている(p. 734a, 746a)。両書は文脈よりすれば、いずれも『俱舎論』の註釈書であると考えられるが、現存していない。筆者はウイグル語資料を整理中、たまたま『金花抄』なる書名とそれからの引用文を見出した。本稿は、この『金花抄』と上記二書との関係を考察しようとするものである。

資料 スウェーデン民族学博物館には、『俱舎論』のウイグル語訳本の端本(完本の約1/15にあたる16枚の貝葉形写本)が蔵されている¹⁾。当本が玄奘訳『俱舎論』(T No. 1558)からの重訳であることは、ウイグル本文中に引用された漢文と葉番号から明らかである。これらの写本のうち、otuzunč yiti ‘第30(巻)7(葉)’の葉番号をもつ No. 40は当本の最終葉にあたり、巻末表記(r. 17-20)²⁾と奥書(r. 53-64)の間にこれから問題とする文が書かれている。すなわち、本葉はr. 21-23で

(21) 浄因道者 菩提名浄 無我道能 (22) 趣涅槃故 故名因道 浄之因道 (23) 依主釈也

と漢字で記したのち、次のr. 24では漢字とウイグル文で

(24) 金花抄中云 kim qaa čav-ta sözlär

“金花抄”で言う。

と述べ、以下r. 25-52にわたり、この書物からの引用と考えられる文を掲げている。この引用文は前文r. 25-39と後文r. 40-50とに分けることができる。前文は

(25) 大師世眼 tigüči šlok-nung yalīng ānātkāk-čä-si bo ärür;

「大師世眼」という頌の文字どおりのインド語はこれである。

で始まり続いて三偈が、後文は

(40) 已善説 tigüči šlok-nung yalīng ānātkāk-čäsi bo ärür;

「已善説」という頌の文字どおりのインド語はこれである。

で始まり同じく三偈が、引用翻訳されている。ここに引用された偈文は『俱舎論』

第 8・9 章中に見出されるものであって、冒頭の「大師世眼」「已善説」の漢字は玄奘訳のものである。すなわち前三偈は玄奘訳『俱舍論』T Vol. 29, p. 152b17-22 [VIII 41, 42, 43], 後三偈は p. 159b9-14 にあたる。

ここで注意すべきは r. 25 と 40 で「……という頌 (śloka) の文字どおりのインド語はこれである」という表現であり、後続のウイグル文がサンスクリット語順で示されている事実である。六偈すべてをここに録文する紙面的余裕はないので、前文と後文より三偈を選び紹介してみたい。最初にサンスクリット文と玄奘訳をあげ、次にウイグル文の転写・直訳を行ない、下にサンスクリット相当語 (root, stem) を並記すれば、次のごとくである。

文 例 A (r 32-36):

gate 'tha śāntiṃ paramāṃ svayaṃbhuvī	自覚已帰勝寂靜
svayaṃbhuvāḥ śāsana-dhūrdhāreṣu ca /	持彼教者多隨滅
jagaty anāthe guṇa-ghātibhir malaiḥ	世無依怙襄衆德
niraṅkuśaiḥ svairam ihādyā caryate //42//	無鉤制惑隨意轉

- (a) barmīṣṭa inčip yig üstünki nirvanqa
 行ったものにおいて、そのとき、勝れて最上なる、涅槃に、
 gata atha parama śānti
 kntün tu(y)mīṣṭa /
 みずから覚ったものにおいて、
 svayaṃ-bhū
- (b) kntün tuymīṣṅ šazīnīn sārgürdāčilärtä ymä...../
 みずから覚ったものの、教えを、保つ者たちにおいて、また
 svayaṃ-bhū śāsana-dhūrdhara ca
- (c) yirtinčūtä umuṣsuzta ädgülärig qoruldurtačīlar üzä
 世間において、救なきものにおいて、徳 を、損う者たちによって、
 jagat a-nārtha guṇa- ghātin
 nizvanilar üzä /
 煩惱によって、
 mala
- (d) İngraj³⁾(sic!)sīzlar üzä özin ökḍāmin amtī yorılır //
 鉤のないものたちによって、みずから意のまま、今、行じられる。
 nir-aṅkuśa svaira iha adya ✓car

文 例 B (r 36-39):

iti kaṅṭha-gata-prāṇaṃ	既知如来正法寿
------------------------	---------

(50)

俱舍論註『金花抄』について (百 濟)

- viditvā śāsanam muneh / 漸次淪亡如至喉
 bala-kālam malānām ca 是諸煩惱力増時
 na pramādyam mumukṣubhiḥ //43// 応求解脱勿放逸
- (a) munī munčulayu boꝟuzta barmiš isig özlügü /
 これをこのように、喉において 行った 寿命を、
 iti kaṅṭha- gata- prāna
- (b) bilip tngri burxanning nomīn šazīnīn /
 知って、天なる 仏の、法 教を、
 √vid muni śāsana
- (c) küčādmāklig ödin nizvanilarnīng ymā /
 強力にする 時を、煩惱の、また
 bala- kāla mala ca
- (d) nāng sīmatlꝟuluq ārmāz ozmaq qutrulmaq kūsüslüglār üzä //
 けっして、放逸となるべきでない。解 脱の 願いある者によって、
 na pramādyā mumukṣu

文 例 C (r 46-49):

- imām hi nirvāṇa-puraikavartinīm 此涅槃宮一広道
 tathāgatāditya-vaco'msubhāsvatīm / 千聖所遊無我性
 nirātmatām ārya-sahasra-vāhitām 諸仏日言光所照
 na manda-cakṣur vivṛtām apikṣate // 雖開殊眼不能覩
- (a) munī inčip nirvanlīꝟ balīqqa yalanguz ävi[r]täči /
 これを、そのとき、涅槃ある 町へ 独り 転じる者、
 idam hi nirvāṇa- pura- eka- vartin
- (b) ančulayu kälmišlig kün tngriining savlīꝟ yruqī üzä yaltrīqlīꝟ /
 如 来ある 日 天の 言葉ある 光によって 輝きあるものを、
 tathāgata- āditya- vacas- aṃṣu- bhāsvant
- (c) mnsiz bolmaqīꝟ uqītadačīꝟ ming ming aryapudgalil(ar) üzä
 無我であることを 顕わす者を、 千 千の 聖者たち によって
 nir-ātmatā ārya-sahasra-
 sözlättilmišig /
 語られたものを、
 vāhita
- (d) biligsiz tirtilar ačīlmišīꝟ ymā körmāzlār //
 無知な 外道たちは、 開かれたものを、 また、 見ない。
 manda-cakṣus vivṛta api na √ikṣ

註 記 〈ウイグル文について〉

① r. 24 のウイグル文 Kim qaa čav が漢字音「金花抄」の音写であることは疑いない。中古音：金 ,kjəm, 花 ,x^wa, 抄 ,tʂ^ʰau

② r. 25 と 40 の yaling はもともと '裸の, naked' を意味するが、ここでは '文字どおりの, 字義どおりの, literal' の意味で使用されている。

③ r. 26-39, 41-52 において Uig. 語で表記された '文字どおりのインド語' の六偈は, Skt. 原文の文法変化にほぼ忠実に従っている。① Number. Skt. の plural は +lar/lār で示されている。ただし Skt. の単語が singular であっても意味的に plural が望ましい場合は plural で示された例が見られる (文例 C. d)。② Case. Nominative は Indefinite case で, Accusative は +^oγ/g, Instrumental は üzä, Dative は +qa/kä, Ablative は +tīn/tin, Genitive は +nīng/ning, Locative は +ta/tä によってそれぞれ表記されている。ただし, gata (√gam) と共に用いられ目的地を示す Skt. の Accusative は Dative の +qa で示されている (文例 A. a)。因みに Skt. の Locative Absolute は, Uig. では名詞・分詞相当語すべてが Locative で記されており (文例 A. a, b), Absolute 構文をもたない Uig. 語としては, この一文は意味を形成しない。③ Verb. Skt. の動詞あるいは動詞的機能を強くのこしたその派生語には, Uig. も動詞の変化形を用いて表現している。Skt. の他動詞の過去分詞には受動詞の過去形 -^olmiš/^olmiš が, 自動詞のそれには他動詞の過去形 -miš/miš が, Gerundive には -γuluq/gülük 形が (文例 B. d), Absolute -tvā には -^op 形が (文例 B. b) 用いられている。また, Desiderative の Stem から作られた形容詞は, Uig. では動詞の Infinitive に kūsüslüg '願望のある' を付加して表現されている (文例 B. d)。④ Compound. Skt. の複合語は, Uig. では語間に適当に格語尾を介在させて表現されている。それらは主として Tatpuruṣa であるが, Bahuvrīhi あるいはその相当語は, Uig. では所有形容詞・名詞を作る +liγ/lig ~ +luγ/lüg を名詞に付加して示されている。⑤ その他。文例 A, a. と B, b. に見られる二つの例外を除けば, 語順は Skt. 原文に従っている。また, 文例 C, d. で mandacakṣus を biligsiz tirtilar '無知な外道たち' と表現するような若干の意識が見られるが, 全体としてはこの種の意識はまれである。

④ 上記のごとく当面するウイグル文は, 漢文からの翻訳であるとはいえ, サンスクリット文体の極端な転写である。その転写の度合いは, これらのウイグル文がトルコ語として文義を形成しないほどである。文例 C にあたる偈文は『俱

舎論』末尾にあるため、当 No. 40 の写本には、漢文 (玄奘訳) からの逐語訳である『俱舎論』本文としての次のようなウイグル文を見出すことができる。サンスクリットからの直訳とも言える文例 C と漢文からの逐語訳である (本来のウイグル語に近い) 次の文例を比較されたい。

文 例 D (r. 8-12):

bo nirvanliḡ orduqa yalnguz iltďäci king yoluḡ/
 ming ming tözünlär üzä yorıtılmıš mnsiz tözlügüḡ/
 kim burxanlıḡ kün tngrińing savlıḡ yaruqı üzä yarutılmıšıḡ/
 näčä açılсар yatılсар ymä közläri umazlar körgäli//
 この涅槃の宮殿へ独り導くところの広い道を、
 千々の聖たちによって行じられた無我の性を、
 およそ仏なる日天の言葉の光によって照らされたものを、
 いかに開き広げられても、それらの眼は、できない。見ることが。
 ② ①

論 説 当面するウイグル文の出典である『金花抄』なる書物は、所引の六偈の内容と Kim qaa čav という音写より考えれば、『俱舎論』の漢文註釈書であったことは疑いない。この『金花抄』が漢文によってどのようにサンスクリット原文の文法事項を表記していたかは知り得ないけれども、上記文例のごとくウイグル文は、膠着語であるにもかかわらず、屈折語であるサンスクリット文の文法変化をほぼ正確に表現することに成功していると言える。

さて「金花抄」なる名は、「金華鈔」とも表記し得ることは論をまたないであろう。すでに記したとおり、『宋高僧伝』には「金華鈔」なる名をもつ『俱舎論』の註釈書が二本見出される。一本は、唐代の円暉の伝に付された崇虞の『金華鈔』十巻であり、他本は同じく唐代の玄約の『俱舎論金華鈔』二十巻である。これら二本は現存せず、その書名はきわめて類似しているため、同一本であった可能性を残しておかねばならないが、今は一応別本と考えておきたい。

筆者は、『俱舎論』のウイグル訳本がその尾跋で引用する当面の『金花抄』は、上記前者の崇虞の『金華鈔』十巻ではないかと考えている。この比定は、書名の一致することのほかに、その註釈のあり方に注目したからである。崇虞の伝はきわめて短かくその人の詳細は知り得ないが⁴⁾、彼は『俱舎論頌疏論本』三十巻 (T No. 1823) を著わした円暉の系統をひく人物であって、伝の文脈からは、彼の

『金華鈔』十巻は円暉のそれと同じく『俱舍論』の偈頌の註釈書であつたらしいことが読みとれる。このことは、当ウイグル本にあらわれる『金花抄』からの引用文が偈頌のみである事実と符合するからである。筆者は、ウイグル文の記述にもとづき、少なくとも所引の六偈に関するかぎり、この『金花抄』ないし『金華鈔』なる書は、『俱舍論』の偈頌のサンスクリット原文を逐語的に字義解釈する註釈書ではなかつたかと推定している。

- 1) Kōgi Kudara, *A provisional catalogue of Uigur manuscripts preserved at the Ethnographical Museum of Sweden*, (1980 未出版). No. 25-40.
- 2) 説一切有部 alqu-nī bar tip sözlädäči sarva'astivaṭ ni'kay-taqī 俱舍論 košavarti šastir 卷第三十 otuzinč tägzinč '説一切有部, すべてを「有る」と説くところの Sarvāstivāda-Nikāya における, 俱舍論, Kośavṛti-śāstra, 卷第三十, 第 30 卷'.
- 3) *ırğay* '鉤 hook' の誤写か?.
- 4) 『新編諸宗教蔵総録』(T No. 2184, Vol. 55) 巻三に, 「(俱舍論) 頌疏義府鈔二十巻或十巻 乾廣述或云崇廣待勘」の字句が見出される (p. 1177a29)。この「崇廣」と当面の「崇廩」が同一人物である可能性は残っている。

(龍谷大学講師)

NEW PUBLICATION

THE BODHISATTVA DOCTRINE
IN
BUDDHISM

edited and introduced by Leslie S. Kawamura

SR SUPPLEMENTS/10

Published for the Canadian Corporation for Studies in Religion/
Corporation Canadienne des Sciences Religieuses by Wilfrid
Laurier University Press, 1981 (xxi + 272 p.)